

小さな喜び ― 生きる喜び ―

中 三

二〇一二年五月二十一日、世紀の天体ショーと日本中を騒がせた金環日食を埼玉でも観測することができました。その日は学校も一時間早めの登校となり、校庭で全校生徒六一四人が観察しました。数分間の出来事でしたが、とても美しく感動しました。

あたりまえですが太陽は一つです。たった一つの太陽とたった一つの月がつくり出す神秘を日本中のみんなが見ています。みんなが一つになれる瞬間。それを考えるととても感動的です。

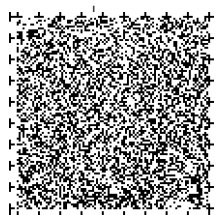
太陽の光は誰を差別することなく平等に明るく照らし、暖めてくれます。こう思いながら太陽を見てみると、毎日自分の周りで起こっている出来事が何と小さなことなのだろうと思えてきます。

中学三年生になって二か月。もうすぐ、毎日くたくたになるまで頑張った部活動を引退します。つらいことも多くありましたが、今考えると、と

ても短かった気がします。僕はこれまで一度もレギュラーになれませんでした。しかし、練習を休まずに参加したこと、雑用の仕事を頑張ったことだけは部員の誰にも負けなかったと思います。コート整備も朝一番に登校して行いました。レギュラー組が練習している中、ボール拾いや雑用を率先して行いました。少し前まで、僕は練習だけしている仲間を見て「何で、自分だけ…」と思うことが度々ありました。なぜなら、いくら心を込めて一生懸命に雑用をやってもテニスが上手になるわけではありません。三年生は二〇人弱いるのですが、大会に出て賞状をもらっていないのは僕を含め二人です。

僕は二年間、一度も晴れ舞台には上がれませんでした。正直、部活動を続けてきた意味がわからなくなることもありました。

二年生の終わりに、顧問の先生が異動になりました。先生はいつも雑用をやっている僕に何も言わず、試合にも出してくれませんでした。お別れの時、先生がポツリと、「お前を表彰台に立たせてやりたかった。」



と話されましたが、その時は特にその言葉の意味を考えませんでした。

三年生になったある日、いつものように練習をし、汗をかいた僕は水を飲みに行きました。そこで、担任の先生とぼったり会った時に部活動の話になり、顧問の先生が言っていたことを話してくれました。

「いつも不満ひとつ言わずに雑用をやってくれてありがたい。本当に公式試合に出してあげられなくてかわいそうなことをした。でも、あの子のおかげでみんなが気持ちよく試合ができる。」

これを聞いた時、僕はうれしくてたまりませんでした。そして、初めて自分がこの部活でがんばる意味、僕の仕事の意味が分かった気がしました。「みんな違ってみんないい」という言葉があるように、人はそれぞれ持っている力も性格も違います。人はみんな違うから、その人がすること、できることにそれぞれ意味があるのだと思うようになりました。レギュラーとして試合に出た人は、試合から学んだことがあると思います。僕は雑用と練習から忍耐を学んだと思います。そして、い

ずれこの忍耐が僕の人生の中で、役立つ時が必ず来るのだと思います。

体が大きい人、小さい人、運動が得意な人、不得意な人、勉強ができる人、苦手な人、障害のある人、ない人、それぞれの個性なのに、それがもとでいじめや差別が起こります。そして、それが不幸な死を招いたり、大きな争いに発展することもあります。僕は、天災や病気で生きたくても命を亡くしてしまう人があるのに、どうしてわざわざ人をいじめたり、争ったりするのだろうかと思いません。

みんなが生きる喜びを自分たちの生活の中から見つけ出し、前向きに生きていくことができたなら、僕たちの周りからいじめ、差別はもちろん、争いや戦争もなくなるのではないかと思えます。

僕は、全校の仲間と金環日食を見た時や、顧問の先生からほめていただいた時のような喜びを毎日の生活の中で探し、大空に輝く太陽のように前向きに生きていこうと改めて思いました。

